

書評 「王陵と駐屯軍」

山根 俊郎

飛田さんの友人である真野保久（まの やすひさ）さんから「こんな本を出しました」と飛田さんに1冊の本が送られてきた。私は、朝鮮戦争による韓国社会の傷跡や変化に興味があり、読ませていただいた。読み応えのある11編の短編小説が収められていた。



「王陵と駐屯軍」朝鮮戦争と韓国の戦後派文学

真野保久／パク・キョンウン [編訳]

◆定価 2500円+税 凱風社 2014年11月5日発売

◆四六判 328頁 上製

◆ISBN978-4-7736-3901-8 C0097

1945年、日本の敗戦とともに植民地のくびきを解かれたはずの朝鮮半島は、喜びも束の間、東西冷戦のまっただ中に投げ込まれた。戦後の混乱はやがて朝鮮戦争の勃発とともに全土に及び、戦乱の中で肉親を失ったり生き別れになる人が続出した。政治・軍事とは遠く離れた山里や都会の片隅で時代に流され、あるいは時代にあらがって必死に生き、また運悪く死を受け容れざるをえなかつた人々の、心の叫びをすくい取った珠玉の短編集。

山根の評価を☆の数で表しました。☆☆☆=満点

I 三八度線を南に越えて

(朝鮮戦争の) 戦後派 越南作家の作品 7話

☆☆☆カピタン李 全光鏞(チョン・グアンヨン)

P8-P42=P35,初出1962年。日帝時代に「国語常用の家」として親日派の外科医師李仁国博士は解放後にソ連軍が駐屯すると民族反逆者として投獄されるが、赤痢対策やソ連将校の瘤の除去手術で信任を得て帰宅できる。朝鮮戦争時に越南して、総合病院の院長になり富を得て米国大使に高価な高麗青磁をプレゼントして米国に移民する。李仁国博士の巧みな処世術を描く。

☆射手 全光鏞(チョン・グアンヨン)

P43-P55=P13,初出1959年。主人公と友人Bは、学生の時から女友達キョンヒを巡り競う。朝鮮戦争で生き別れになり再会した時、キョンヒはBの妻になっていた。Bは利敵行為をした罪で銃殺の処され主人公が射手になる。戦争が変えた人の運命を描いている。

☆☆☆誤発弾 李範宣(イ・ボムソン)

P56-P94=P39,初出1959年。三八線以北の地で地主だった家族が迫害から逃れソウルに移り住むが、越南者が多く流れ込む山にバラック小屋に張り付く「解放村」だ。家族を養うに到底足りない安月給、栄養不足の娘、身重の妻、そして母は発狂してしまい北の故郷に帰ろうと、日々「行くんじや！」とミイラのようになった体で叫ぶ。妹は西洋人相手のパンパンになり、弟は国軍除隊後、職にも就けずにぶらぶらしているが、家族も養えない兄を「法を犯す勇気を持たなくてはならない」と批判し、拳銃強盗事件を引き起こす。警察に捕まった弟に面会し家に帰ってみると、妻が難産で病院に担ぎ込まれたと妹から告げられる。慌てて病院に駆けつけたが妻は亡くなっていた。呆然としながらも「何かが終わった」と夜の街にふらふらと出て行く主人公へこうした破滅的な暮らしと不条理が描かれた作品は映画化もされた。映画『誤発弾』

(1961年) 楊賢穆(ユ・ヒョンモク)監督、主演:

金振奎、崔戊龍、文貞淑



☆☆鶴村の人々 李範宣(イ・ボムソ)

P95-P119=P25,初出 1957年。山奥の鶴が飛来して雛を3匹産めば豊作になる鶴村の寓話的な話。日帝36年間は鶴が来なかつた。解放になり鶴が再び来るようになつたが、里長や書堂の朴訓長ら長老が中心になって営まれていた生活は人民軍の出現で一変してしまう。幼馴染との恋に破れて村を去っていた朴訓長の孫のパウが現れて、人民委員長になり村人に命令するが村人は従わない。怒ったパウは鶴を銃で撃ち殺した。村人たちは里長が率いて釜山に避難する。苦労して鶴村に帰つて來ると鶴の巣の木は焼かれていた。

☆カモメ 李範宣(イ・ボムソ)

P120-P136=P17,初出 1958年。釜山との連絡船が1日に1往復するのどかな島に避難民の主人公家族。中学校の教師教員を7年過ごした。喫茶店「カモメ」の盲目の主人や品のある乞食の老人など戦争で傷ついた人々との交流と突然の別れが描かれている。

☆脱郷 李浩哲(イ・ホヨル)

P137-P158=P22,初出 1955年。北から船で釜山に避難してきた4人の青年の話。空き貨車をねぐらにして、埠頭の日雇い仕事や泥棒で暮らしていたが「一緒に故郷に帰ろう」と言い合つては仲間が動き出した列車から転落して死ぬと葛藤がひどくなり別れる。

☆☆☆南から來た人々 李浩哲(イ・ホヨル)

P159-P219=P61,初出 1984年。北朝鮮で高校生の時、朝鮮戦争が起きて人民軍に動員されて、米軍の爆撃に遭つたり、南側から來た義勇軍の教育を任せられた19歳の主人公の話。作家の自伝的小説である。元山市の青年俱楽部合唱団でソ連の歌などに親しんだ。私(山根)は、多くのソ連の歌の紹介があつたので解放後の北朝鮮の音楽状況が垣間見えて良かった。

II 三八線以南の作家たち

(朝鮮戦争の) 戰後派 在南作家の作品 4話

☆☆☆王陵と駐屯軍 河瑾燦(ハ・ゲンチャン)

P222-P249=P28,初出 1963年。先祖の王陵を誇りに思いそれを掃除して守ることを使命とする朴僉知(パク・ヨンジ)であったが、王陵近くに西洋人部隊が駐屯し始めると村社会が変容していく過程が描かれている。村にやってきた娼婦たち。朴僉知は王陵の周りに土塙を積む作業に没頭するが、朴僉知の一人娘の今禮(クムネ)は娼婦たちの部屋に出入りするようになり化粧をするようになった。そんなある日、駐屯軍が忽然

といなくなり、今禮も家出をする。数年後、今禮は混血児の子供を連れて帰ってきた。朴僉知はショックと先祖様に対する申し訳なさで寝込んでしまう。

☆☆受難二代 河瑾燦(ハ・ゲンチャン)

P250-P263=P14,初出 1957年。第二次世界大戦の時に南洋の島で日本軍の飛行場建設に狩り出されてダイナマイト発破の作業中に米軍の飛行機の機銃掃射に遭い、発破の瞬間に壕に飛び込み片腕を失つた萬道(マンド)は、息子の鎮守(チンス)が朝鮮戦争の戦線から帰つて來るので駅まで迎えに行くが、何と息子は手りゅう弾で片足を失つていた。当初、萬道は怒り、悲しむが小川を渡るときには息子を背負い親子の情が次第に通い合つてゆく。

☆ 213号住宅 金光植(キム・グアンシク)

P264-P285=P22,初出 1956年。朝鮮戦争が收まり新たな生活が始まった人々を描いた作品である。ソウルの上道洞の213号住宅に住む主人公金明学(キム・ミョンハク)は釜山の紡績工場で働いていたが朝鮮戦争で工場が破壊されたためソウルの韓国最大の印刷工場で臨時に働き始めた。技師長になったが、2、3月の教科書印刷の書き入れ時に自家発電が故障続きでその責任を取らされて退職させられる。その翌日、酒を飲み最終バスで帰宅してヤンキーと若い韓国女性が住む家を我が家と間違つて入り、警察に突き出される。

☆神話の断崖 韓末淑(ハン・マルスル)

P286-P301=P16,初出 1957年。朝鮮戦争が終わり大きく変わつた社会の中で主人公の美術大学の女子大生眞英(チヨン)の行動はそれまでの倫理観に縛られずに大胆である。冬に下宿の食事代が払えなくて追い出された眞英は恋人慶一(キヨンル)がいるが、食事代と宿代を稼ぎに明洞のダンスホールに出かける。たまたま出会つた金持ちの若い美男子とホテルで一週間余り一緒に過ごすことにし大金を得る。しかし、その男は兵役忌避者として逮捕される。ホテル代は支払われており手元には大金が残る。下宿の食費も支払い高価な食事や買い物をして画材を買いホテルに戻り、恋人に手紙を書こうとするが、うまく書けない。

■用語解説 P302-P307=P6,は、韓国社会を理解するのに助かる。—作家紹介—P308-P310=P3,と＜解説＞韓国戦争と韓国の戦後派文学 真野保之、P311-P322=P12,は、韓国文学への関心を大いに高める。

とても面白い本でした。ぜひお読みください。(終)